論文・レポート執筆のススメカタ　第３弾！

卒論・修論執筆応援キャンペーン開催します！

あなたの論文の「困った」を
図書館がサポート♬

夏季特別貸出は
文献収集のチャンス！

試験期間には臨時開館
&開館時間延長も！

2018
7

京都大学 吉田南総合図書館（愛称：逍遥館（しょうようかん））
〒606-8501
京都市左京区吉田二本松町
Tel：075 (753) 6524, 6525
Fax：075 (753) 6896
Email：eturan61@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP：http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/yoshidasouthlib/
Blog：http://yoshidasouthlib.hatenablog.jp/
Twitter：@yoshidasouthlib

HP　Twitter

Library Newsletter

【ガイダンス】卒論・修論執筆応援キャンペーンを開催

そろそろ夏も本番、卒論や修論の執筆に本格的に取り組む方も多いと思います。ただ、実際に論文を書き始めるとなると、不安に思うことがいろいろと出てくるかもしれませんね。

そこで吉田南総合図書館では、この夏も**「卒論・修論執筆応援キャンペーン」**を開催します。先輩が実際に書いた論文の展示をはじめ、先輩に執筆当時についてアンケートをとったものをまとめた体験記なども配布します。もちろん論文の書き方に参考となる関連図書の展示も行いますよ。

平日の9時から17時は、1Fの調査・相談カウンターにて、先行研究の探し方や資料の取り寄せのご相談も受け付けていますので、どうぞお気軽にスタッフまでお尋ねください。

〈展示協力〉 総人のミカタ

論文・レポート執筆のススメカタ　第3弾
【卒論・修論執筆応援キャンペーン】
期間：7月2日（月）～8月3日（金）

【相談受付】
時間：平日9時から17時
場所：1F 調査・相談カウンター

【展示】 リアル卒論・修論
【配布】 先輩たちはこうしました。
【展示】 論文の書き方のおすすめ本

くわしくは↓

【イベント】キャンペーン連動企画「総人のミカタ」公開座談会！

今回の「卒論・修論執筆応援キャンペーン」には「総人のミカタ」のみなさんに多数ご協力いただいています。そんななか、さらに特別企画が実現！右記の日程で「総人のミカタ」メンバーによる公開座談会を開催します。
キャンペーンで配布しているインタビュー集「先輩たちはこうしました」では触れられていない裏話や研究生活などについてたくさんお話しいただく予定です。先輩たちの生の声を聞きに、ぜひ会場へお越しください。事前のお申込は不要です。たくさんのご来場をお待ちしています！

【日時】
2018年8月2日(木) 17:45～
環on(人間・環境学研究科棟1F)にて
※詳細は別途チラシをご覧ください

Follow me！ @yoshidasouthlib

【おしらせ】試験期間の臨時開館・開館時間延長を実施

臨時開館･開館時間延長を、定期試験開始2週間前から実施します！
日時について、詳細は下記カレンダーをご確認ください。
実施期間:7月9日(月)～7月26日(水)

※土曜日の開館時間延長、日曜･祝日の臨時開館は定期試験開始1週間前からとします。

7月　June

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

00	9:00-20:00
00	9:00-21:00
00	10:00-15:00
00	10:00-18:00
00	休館日

【おしらせ】夏季特別貸出はじまります

特別貸出期間中はいつもより長く本を借りることができます。論文執筆中の方には文献収集の絶好のチャンス！論文執筆はまだ先…という方も、論文のテーマを決めるためには、早いうちから様々な学問分野に触れ、知見をひろめておくことが肝心です。この機会をぜひご利用ください！

■実施期間
学部生:7月23日(月)～9月15日(土)
院生/教職員:7月23日(月)～8月31日(金)
＊8月11日(祝･土)～20日(月)は夏季休館です。

■返却期限日　2018年10月10日(水)
＊夏季特別貸出の図書は更新できません。

■冊数(平常通り)
学部生:開架 5冊　書庫 10冊
院　生:開架10冊　書庫 30冊
教職員:開架10冊　書庫 対象外

先輩にお話を聞きました［前編］

お話を聞いた先輩：Nさん
人間・環境学研究科修士二回生
（平成三十年三月時点）

■修論のテーマを教えてください。

「トマス・リードにおける「知覚の直接性」の研究」です。彼は二種類の知覚の直接性を訴えているのですが、それぞれが懐疑論にどのような効果を持つかを主に考察しました。

■哲学に興味をもつようになったきっかけや経緯を教えてください。

最初は今研究している知識の理論には全然興味がなかったんです。小学校のときはずっとゲームをしていて、中学までは成績もそれほどよくありませんでした。それが、中学三年時の担任がとても厳しい人で、宿題をやってこないと個人面談があって、宿題をしていないことも親に報告されてしまうので、それはまずいと思い勉強しはじめました。高校に上がったら、成績も良くなって、そのまま京大にきてしまいました(笑)。

で、きっかけですよね。高校当時から漠然と、高校生ならではの(笑)野心と無知が混在した感じがありました。でも何もやっていない自分がいて。そんななか、高校の「倫理」の授業で、いろんなものの考え方があるのを知りました。論理的にどうこうより、様々なものの考え方があること自体に漠然と楽しみを感じました。よその高校を知らないので、比較はできませんが、その授業は楽しかったです。哲学に興味を持ったのもそこからです。

■具体的にどういうことを考えて今に至ったのですか？

単純に好みの問題かなと思いますが…なんでしょうね。

現在とどこまでつながっているかわかりませんが、高校時代に、講談社プラスアルファ文庫などで、拷問のおそろしさを面白おかしく書いている本に出会ったことも関係しているかもしれません。精神疾患とか中世におこなわれた拷問について書いてあって、興味をひかれました。残酷なもの、グロテスクなものを見るのに慣れていた時代ですね(笑)。

このような類の本が世に出ているということは、「狂気だ、残虐だ」と言いながら、他の人も意外と面白がってそういう本を見ているのだな、エンタメ性をもって受け止められている現実があるのだなと気づいて、これらを書く人、面白がって読んでいる人、当時拷問をしていた人、それから自分を比べて、何か差はあるのかな、違いがあるのかな、とふと思い立ったんです。自分が正常だと思っているから相手のことを狂っていると言っているだけで、自分たちも大差ないんじゃないか、ということに思い至りました。

こういったことに興味を抱きつつ、京大に入学して、精神医学の授業（精神医学各論）を受ける機会があったときに、意外と精神疾患の概念も僕たちが想像しがちな「狂人」から軽度のものまで裾野が広いということを聞いて、ああ、自分の生活しているこの場所にも何かしらおかしいところを持っている人が少なからずいて、でも折り合いをつけて生活している、ということなんだなと感じました。こうした背景があって、僕たちの「正常性」とか、それをもとに成立している「常識」というものにも興味がわきました。

■リードを研究したいと思われたきっかけについて教えてください。

岩崎武雄先生の『西洋哲学史』(注1)を読んでいると「スコットランド常識学派」という項目を見つけ、そこにリードの名前を見たのが最初です。漠然と、「常識」と哲学の結びつきが、先に述べたような「正常性」と異常性の話と結びつくのかなと思ったんです。

その後学部二回生のとき、今の指導教官の基礎ゼミナールで授業後「リードに関心がある」と言って、全集をコピーさせてもらいました。当時は「哲学者のことだし哲学の先生に聞けばいいだろう」とあまり深く考えずに質問したのですが、実はその指導教官がバークリやリードを取り扱う、ドンピシャの専門家だったのです(笑)。

■研究のひらめきはどうやっておきるのですか？

僕の場合は中学生時代が体力と集中力の持続するピークだったので、本をそこまでずっと読めない(笑)。論文も数ページ通して読めるような集中力がないんです。すぐに立ち上がってお茶を飲んだり散歩に出かけたりします。でも、そういうときにこそ霊感みたいな、そんな類のものがおりてきますね(笑)。

改めて立ち位置を俯瞰的にみているわけではなくて、ぼーっとしていると「ちょっとまてよ」と。でも、ぱっと思いついたものは、メモする前にぱっと忘れちゃうんです。それはどうしようもない。ただ、一回思いついて、自分が執着したくなるようなアイデアであれば、放っておいてもまたおりてくるということが感覚でわかります。結局、自分の関心が強いアイデアが最終的に残って他は淘汰されていきます。

なんでもかんでも手を付けていられないので、これはどうしても覚えておきたいと思うものは、SNSで呟いたりしています。そういうことを繰り返しながら、少しずつ軌道修正して方向性を決めていきました。

でも、一番良いのは、幅広く文献を渉猟して、そこから計画的に進めることだとは思います。でも、計画はとん挫するものなんですよねえ(笑)。

■論文提出直前の様子はどんな感じでしたか？

僕の所属している思想文化論講座では、修士の在籍中に中間発表が三回（一回生の十二月、二回生の七月と十二月）あります。十二月の中間発表のときに一万字位（本番は四万字）の論文を発表しました。発表後、先生や研究室の先輩からコメントや質問を受ける形で、一人一時間あまりかかります。得られたコメントをもとに、最終調整をして、提出締切の二日前に提出しました。

中間発表から締め切りまでひと月あり、なおかつ、それまでに同じように二回発表しているので、材料は単純計算でも三万字ある状態です。これらをベースにして論文を作り上げていく感じです。

■計画的ですね！

いや…構成を決めたのは、実は三回目の中間発表前後なんですよ。本当はもうちょっと考えたい気持ちがありましたが、十二月の時点で、今から大工事(笑)をすると思うと、さすがに尻ごみしました。ここでぐちゃぐちゃになったら、そのほうが問題だろうと思って、あるもので勝負するしかないと腹をくくりました。

細かいところまで詰めてちゃんと書きたかったのですが、結構最後のあたりで投げやりな気持ちになっていました。原稿が遅くなればなるほど、内容の確認や、表現のまずいところの洗い出しが不十分になって、自分でもこれはひどいと思うほど雑だったと思います。論文を書いていて、うまくいっていない自覚があり、それをなんとかしたかったのですが、人間関係など生活上のトラブルも重なったせいかメンタルが弱ってしまって、鬱屈としてしまいました。書けない読めないとなって、アルコールに走ったこともあります。そんなわけで結局、論文提出後の公聴会で、表現が稚拙な部分が散見されると指摘され、「おっしゃるとおりでございます」となりました。

■書き終わってよかったことは？

リードの専門家としてやっていくうえで、道筋がみえたことです。リードの哲学を読み解くにあたって、可謬主義（私たちの知識はどれほど確実にみえても間違いうるということを認める立場）を議論の中心に据えて進めていったらいいんじゃないか、という。

リードの議論では、たとえば、「常識」の捉え方や異なる意見がぶつかったとき一致に至る方法など、私たちの生活とも密接に関わる考え方が知識の理論に組み込まれています。それについてもっと知りたいと思う気持ちがあるので、さらに食い込めたらいいなと考えています。

■修論はイメージ通りに出来上がりましたか？

稚拙な出来だったと思います。自己採点すると、六十点ですかね(笑)。

■修論執筆を通して、感じたことは何ですか？

自分の意見や考えを決められたと思うと、すっきりします。もちろんそれが最終決定ではないにしろ、とりあえずこういうことが言えるんじゃないか、ということが決まると、気持ちが安心しました。

■反対に苦労したことは何ですか？

論文を書くときって、議論の根拠さえしっかりしていたらそれでいいわけじゃないのだなと。公聴会のときも言われましたが、リードの可謬主義について売り出したい、という意思が先行してしまい、なぜこのトピックをセールスしたいのか、という確固とした理由がうまく説明できなかったことが残念でした。

結局自分がどういう立場をとるのかという前提は、本論の議論の根拠だけでは表現できないと感じました。謙虚に控えめに、という姿勢を保ちながら、自分はこういう態度で対象に臨みます、という自身の態度表明も重要になってくるのではないかと、公聴会を終えた後に思い始めたところです。

■気分転換の方法はありますか？

やりかたがあったら教えてほしいです(笑)。無目的である状態が良いのでは、と思って、僕は歩いたりカラオケに行ったりして気分転換をしていました。ただ、お酒や煙草に逃げるのは絶対やめたほうがいいです。健康を害さないことが一番だと思いますから。

■影響を受けた本があれば教えてください。

修士二回生のとき、ハリー・コリンズの『我々みんなが科学の専門家なのか？』(注2)を読みました。この本のテーマは、専門家と普通の人の境目は何か？普通の人も知識さえあれば専門家になるのか？　というものです。知識の理論というと、たとえば知識を形式的・概念的に「こういう条件を満たしたら知識だ」と考察することが多いように思いますが、この本では実際にある共同体のなかで知識をどう考え、扱うべきかという観点が含まれていて、非常に面白いと思いました。

それから、学部一回生のときに読んだ『ライフヒストリーレポート選』(注3)ですね。当たり前のことではあるのですが、世の中には様々な人がいて実際に生活をしてきたのだ、ということがダイレクトに伝わって、自分の狭量でどこか専門家至上主義的な考え方を見直す契機となりました。知識を考えるうえでも、専門家の知識だけではなく普通の人々と専門家の関係などを考えるきっかけになりました。

■図書館について一言お願いします。

京大は図書館がたくさんあるので、自分が求めている資料がすぐに手に入る場所にある、という安心感はありました。

■後輩のみなさんに一言アドバイスをお願いします。

計画は得てしてうまくいかないものです(笑)。だから、あんまり一つのアイデアに縛られすぎてしまうと、ちょっとこれおかしいな、となったときに、方向転換する余裕がなくなることもあります。ですので、もっとほわほわっとしていても良いのでは、と思います。つまりは、いくつか選択肢を考えておくということです。もちろん、論文の締め切り直前に大幅に変更はできませんが、いくつかの方向性を考えておいて、一つだめなら他をあたる、くらいにしておいたほうがいい。興味を失ったことをやり続けることもあると思うので。

実は自分自身も卒論を書いていた終盤辺りは、自分の設定したテーマについて興味を失っていました。それで、切り替えるためには、いくつか方向性を持っておくと、飽きがこなくていいのでは、と思いました。自分が今やっていることに縛られず、いろいろ幅広く関係しそうな文献を読んでいたほうがいいと思います。

■Nさん、ありがとうございました。

Library Newsletter 第5号
(2018年10月号) でも、先輩の
インタビューを掲載します。
どうぞお楽しみに！

【参考文献】　注1『西洋哲学史』(1F和書：130.2||S||11)　https://m.kulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/BB03116679　注2『我々みんなが科学の専門家なのか？』(1F和書：404||W|

本館開館日程表

7月

■論文・レポート執筆のススメカタ③
卒論・修論執筆応援キャンペーン
2日（月）～8月3日（金）

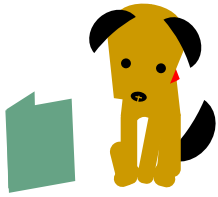
■臨時開館・開館時間延長
※右カレンダーを参照
※試験月のため、28日（定例休館日）
　も開館します

■夏季特別貸出を開始
23日（月）から

8月

■「総人のミカタ」座談会
2日（木）17:45～

■夏季休館　11日（祝・土）～20日（月）
※環onも休室



00 9-20　00 10-15　00 休館
00 9-21　00 10-18　00 定例休館

7

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

8

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

9

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

環on 開室日程表

環on Library わおん
話せる図書館
「環on(わおん)」（人環棟1F）

開室：月～金　9:00-17:00
休室：土・日曜日・祝日
　　創立記念日（6/18）
　　冬季休業期間
　　卒業式の翌日～4/3, 8/11～8/20